

紀念標の題字は、征西の總督有栖川宮の御親筆にて、明治紀念之標の六字を載せ給うて、二品大勳位熾仁親王書と落款し給へり。

建明治紀念標碑銘

堅石重疊、上安銅像、此爲日本武尊。其下題曰明治紀念標。蓋以十年西征之役第七師管軍人戰死者有慕於尊之忠烈也。願西鄉隆盛之叛、勢實猖獗、逮獲雋八閏月、而第七師管之人、殞命砲刃、轉身溝壑者殆六百人。今茲金澤營所將校等、追傷往事、欲建標以慰忠魂。來相告、此役本縣令千坂高雅爲陸軍中佐、親親其慘狀、不能無感云。嗚呼人誰不欲生而惡死、而百戰不撓、視死如歸、雖職分所當然、非敵愾志深者安能如是乎。是可以表章、況於戰死者乃我縣民乎。因特屬一等屬正七位石川昌三郎十五等出仕官崎豐次助其舉。卜地於金澤公園以經營焉。衆相傳嘉之、或捐資、或助功、數月而功竣。此豈忠勇報國之誠、使人感發者非耶。而今而後歲時必致祀、則彼暴骨于陸日豐肥者之忠魂有所慰、而又足以勵忠勇於後世矣。千坂高雅建石勒銘曰。

奮挺埒亂 敵愾勤王 遺勳永在 惟武惟揚 金城陽丘

按するに、紀念標に標出せる日本武尊の銅像は、是景行天皇の御世、尊をして熊襲國を征伐せしめられし故事に據りたるものにて、熊襲國は即ち日向・薩摩の地なればなり。日本紀に、景行天皇立播磨稻日太郎姬爲皇后、后生一男第一曰大碓皇子。第二曰小碓尊。小碓尊亦名日本童男。亦曰日本武尊。幼有雄略之氣、及壯容貌魁偉、身長一丈、力能扛鼎焉。二十七年冬十月、遣日本武尊令擊熊襲。時年十六、十二月到於熊襲國。因以伺其消息及地形之險易。時熊襲有魁師者、名取石鹿文。亦曰川上梟師。悉集親族而欲宴、於是日本武尊解髮作童女姿、以密伺川上梟師之宴時。仍佩佩襦裏、入於川上梟師安室云々。日本武尊抽襦中之劍、刺川上梟師之胸云々。と見ら、古事記には、給其姨倭比賣命之御衣御裳、以納納于御懷而幸行。故到于熊曾建之家云々。如童女之髮、梳垂其結御髮。服其姨之御衣御裳。既成童女之姿、交立女人之中。入座其室內。とありて、今爰なる御姿をば銅像に鑄しめたるものなり。手に携へ給へる劍は、所謂匕首なりといへり。匕首、垂仁紀にヒモガタナとよめり。さて翌二十八年春二月、日本武尊奏平熊襲狀曰云々。

屹斯銅標 忠魂宜安 山海圍繞
明治十三年十月

石川縣令從五位勳五等千坂高雅銘
石川縣大書記官從六位熊野九郎識

右標石の高さ二丈一尺五寸、日本武尊銅像の高さ一丈八尺三寸なり。

明治十年西南の役に死せし人々の紀念碑
にありつくべき歌を金澤營所のもとめに
よりてよめる。

大教正 大谷 光勝

國のためつゆと消えてものゝふの

名こそ玉とは世にひびきけれ

大教正 光尊

國のためたてしさをは萬世の

未までのこれ越のいしよみ

權大教正 大谷 光登

史編歴々美名芳 想見當年血戰場

發氣凜然凝不散 紀功標畔月如霜

是以西洲既證百姓無事、とありて、四十年にまた東夷を征伐せしめられたり。國名風土記といへるものに、景行天皇の御代に、日本武尊東夷征伐の時、諸國を巡行し、荒血山を越えて北陸道に下り給ふ時、尊の兄大碓皇子、北陸道は難所なり、小勢にては定めて夷等に落されなんと、數萬の軍兵を引率して、江沼國にて追ひ付き奉らる。尊賀びを加へたりと仰せられ、加賀國と號すと見ゆ。又三州志來因概覽に、日本武尊東夷征伐の時加賀國に至る。時に國人尊の軍に馳せ加はりて、東夷征伐の偉勳を賀す。加賀の名義茲に防る。今河北郡加賀爪即ち尊の神旗を樹て給ひし遺地といふ。國俗古來人碑に載するもの全く妄誕と謂ふべからず。といへり。平次按するに、かゝる俗説は論するに足らずといへども、爰に記載す。

○竹澤館跡
此の館址は、今博物館の地邊にて、舊藩十二世權中將齊廣卿、此の地を養老所と定められ、そのさき此の地にありし學校及び藩士の第宅共を移轉せしめ、蓮池の亭地をも取り込め一園の地となし、竹澤の境内とせられたり。さて其の